

日本の

執事イメージ史

物語の主役になった執事と執事喫茶

久我真樹

気鋭の**英国文化**研究者が
みんなが大好きな“**執事**”を徹底分析!

執事といえば

なぜ

「**英国**」?

なぜ

「**セバスチャン**」?

日本の3大執事作品

『**黒執事**』『**メイちゃんの執事**』

『**謎解きはディナーのあとで**』も大解説!



日本の執事イメージ史

物語の主役になった執事と執事喫茶

久我真樹

星海社

138



本書は、「日本の創作における執事のイメージ」が、どのように描かれ、どのように広がり、どのように変化していったのかを考察する本です。

様々な漫画・小説・アニメなどの作品中で脇役だった執事が、1990年代から次第にメインキャラクターとなり、低年齢化する動きが目立ちました。そして、2006年の「執事喫茶」の誕生に代表される「執事ブーム」が生まれ、「執事」のイメージ拡大が顕在化しました。

本書では前者の1990年代から2005年までの執事イメージや作品の増加を「執事トレンド」、2006年以降の主役化作品の急増を「執事ブーム」として切り分け、ブームが生じるまでと生じた後の「日本の執事イメージ」を比較します。

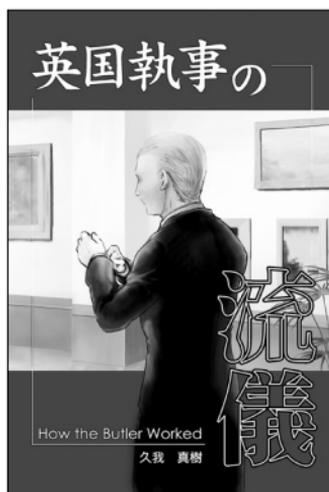
私が大好きな「英国執事 (Butler)」

本書の著者、久我真樹は英国のヴィクトリア朝（1837～1901年）から第二次世界大戦（1939～1945年）までの時代を中心に、日常生活を支えたメイドや執事などの家事使用人の仕事や職場環境を研究する立場にあります。

研究を始めた2000年当時は和書を中心に資料を集め、自分の好奇心を満たす情報が十分に無かったので2001年から英書をメインにシフトし、研究成果を同人誌の形で発表し始めました。

2010年には、講談社から『英国メイドの世界』を出版しました。同書はメイドやコック、執事やその部下のフットマン、庭師、御者の仕事内容や職場となる屋敷、就業環境などを扱った資料本です。

研究で強く関心を引かれた職種の一つが「執事」で、2009年には『英国執事の流儀』という執事に特化した同人誌を作



同人誌『英国執事の流儀』

りました。実在した英国執事の生き方や転職状況、職場環境などを考察しながら、「優秀な執事とは何か」を現代人の観点で再構築しました。

この本を作れたのも、英国では「家事使用人の自叙伝」が刊行され、参考にできたからです。「執事の王」とまで呼ばれたアスター子爵家のエドウィン・リー、メイドとして働きながらも歌手になる夢を捨てきれずに先々で失敗したジーン・レニー、批判的な目で雇用主を見ながら自身のキッチンでのキャリアを磨いたマーガレット・パウエルなど、家事使用人たちが自らの人生を語る本が、私の参考資料でした。

会社組織で働く本業を持ちながら研究する私にとって、「組織で働き、人間関係の中で仕事を」家事使用人としての仕事や日常を描く彼らは、身近な存在でした。

もちろん、過去とは労働環境・生活環境に差異はあります。それでも、より良い職場で働きたいと転職を繰り返したり、足りないスキルを得られる機会を探したり、求人広告を見て面接に行ったりする姿は、転職活動をしていた私にとって、馴染みあるものでした。

家事使用人は忠義を尽くし、代々同じ家に仕えると思ひ込んでいた私にとって、転職の話は目から鱗の話でした。確かに、同じ一族に忠誠を捧げた使用人もいます。しかし、それは多くの場合、待遇面で報われていたからです。さながら、終身雇用が保障されて、退

職金や年金で報われた時代のように。

現代との類似点は、待遇が良いとされる企業への就職のしにくさにも表れます。待遇が良く、給与が良い職場は競争が激しく、離職率も低く、就職できるか運と縁に左右されます。同じ執事やメイドといっても、大勢の使用者がいる屋敷と、少数の使用者しかいない家庭では、給与も責任範囲も働く大変さも得られる経験も異なりましたし、同じ仕事をしても雇用主の経済力で給与に差も出ました。

特に私の興味を引いたのは、執事が「管理職」だったことです。ちょうど当時の私は管理職になり、求められるスキルの違いに苦労しました。その時に出会った執事エリック・ホーンの自伝には、次のような言葉がありました。

優秀なフットマンが、極めて無能な執事になることも多いのです。ボタン（訳注・フットマンのお仕着せ）を身につけている限りにおいては大丈夫だったことも、黒いコートを着て（訳注・執事になること）部下を持つようになった途端にそうではなくなり、途方にくれます。

（“WHAT THE BUTLER WINKED AT” p. 158）

これは、「現場で活躍していた人が昇進して管理職になった途端にダメになる」姿を指すもので、身に染みる言葉でした。

執事への関心を深めた当時の私は「執事はどういうマネジメントをしていたのか」、「優秀な執事とそうでない執事の差は？」と考えるようになりました。

印象的だったのはアスター家の執事エドウィン・リーで、彼は主人がゲストを招く際には、ディナーで給仕する使用人たちに「リハーサル」をさせる合理性を備えていました。「一緒に働けるか」「どの執事が上司として尊敬できるか」という観点で家事使用人を見ることができるようになったことは、私にとって大きな財産となりました。

そうした「英国執事の仕事」を描き出し、さらに「執事の仕事の流儀」を持ち込んだ本が、日本でも2017年に話題となりました。同年にノーベル文学賞を受賞した英国人作家カズオ・イシグロの代表作品の一つ『日の名残り』（1989年。日本語版は1990年に土屋政雄／訳、中央公論社）は、英国執事の一人称で描かれた作品だったのです。

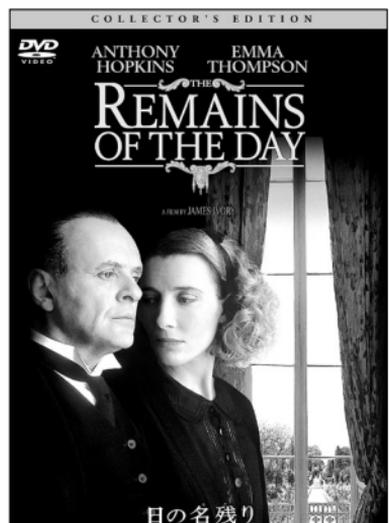
『日の名残り』は世界で最も有名な、執事が主役の作品です。英国貴族ダーリントン卿に仕えた往時を回想する、執事ミスター・ステイブンスを語り手として、第二次世界大戦前と戦後の時間軸を行き来する形で物語は進みます。主人に忠実に仕え、屋敷を運営する

男性使用人の責任者・執事と、同僚で女性使用人の責任者・ハウスキーパー、ミス・ケントンの仕事があわせて描かれました。

1993年にはアンソニー・ホプキンスとエマ・トンプソンの共演した映画が制作され、1994年には日本公開されました。同作品は、アカデミー賞の様々な部門にノミネートされる話題作となりました。そして2017年のノーベル賞受賞後、カズオ・イシグロの『日の名残り』は日本でも再度脚光を浴び、書店の店頭を飾りました。

執事イメージが広がる日本

そんな「執事が主役を務める」作品が、日本では1990年代から増加し始めます。私
がそのことを認識したのは、「日本のメイドブーム」の研究を通じてでした。



映画『日の名残り』

『英国メイドの世界』刊行後、「日本のメイドをどう思うか」と多くの方に聞かれました。また、私がメイドが好きな読者の方と出会えたのも、メイドブームがあり、メイドに関心を持つ人がいればこそだと思います。メイドブームを解説する『日本のメイドカルチャー史』（星海社、2017年）を書きました。

日本のメイドブームは、大きく三つの軸に分けられます。一つ目は「メイドが主役になる作品の増加」です。1970年代の少女漫画やアニメ「世界名作劇場」シリーズなど様々な作品の「脇役」に過ぎなかったメイドが、1990年代のブームから「主役」や「メインキャラクター」となっていきました。

二つ目は同じ1990年代のコスプレブーム・制服ブームと混ざり合い、やがて「メイド喫茶」が発明され、メイド喫茶ブームへと至る流れです。「メイド」という言葉には「メイド店員」を指す意味も加わりました。

三つ目が、これらのトレンドの末にメイドが「当たり前前の存在」となっていたことが挙げられます。様々な漫画・ラノベなどでメイドは定番の存在として登場するようになりました。現実でも文化祭やマラソン大会など仮装の場で、メイドコスプレが普及しました。研究中、メイドと類似した「ブーム」を巻き起こしている「執事」が浮き彫りになりま

した。メイドブームと同様に、1990年代に少しずつ執事をメインキャラクターに据えた作品が姿を見せていくのです。

2006年には、執事を主役化した大ヒット漫画『メイちゃんの執事』（宮城理子、集英社）と『黒執事』（枢やな、スクウェア・エニックス）の連載が始まりました。

前者は2009年にドラマ化し、若手イケメン俳優が執事を演じて話題となりました。後者も複数回アニメ化し、世界でも支持を集めるベストセラーとなりました。

執事ブームの転換点に選んだのは、この2006年です。メイド喫茶ブームがピークを迎えていく2005年には、メイド喫茶を見た女性たちから「執事が店員をする執事喫茶」を望む声が高まり、2006年に日本初の「執事喫茶 Swallowtail」（スワロウテイル）と、次いで「外国人執事喫茶 BUTLERS CAFE」（バトラーズカフェ）が誕生しました。そこで訪問者は「お嬢様（またはプリンセス）」「旦那様」となって、執事から給仕を受けました。

この執事喫茶の影響を受けて生まれた作品が、出版史に残る大ベストセラーで「毒舌執事」影山が活躍する『謎解きはデイナーのあとで』（東川篤哉、小学館、2010年）です。2011年にはドラマが放送され、こちらも人気を博しました。

私が本書で考察する「日本の執事ブーム」とは、「作品の脇役だった執事が主人公となっ

ていくこと」です。そしてその作品には「執事喫茶」も含まれます。

「メイド」も「執事」も同じ家事使用人です。その「家事使用人」の職業が類似した形で展開し、ブームとなっていくことは私にとって非常に興味深く、「日本のメイドブーム」と合わせ鏡となる「日本の執事ブーム」の本を書くことにしました。

思い起こせば、私も執事ブームの片鱗を垣間見たことがあります。2006年に日本最大の同人誌即売会「コミックマーケット」に参加した時、「執事」を名乗る男性二人が、別々に私の同人誌を買いにきました。

当時の日本では、執事に関する資料は不足しており、参考にするためと理由を話してくれました。一人は執事喫茶の店員で、もう一人は海外の執事学校へ留学すると話してくれました。「そういう時代なのか」と当時の私は深く感じ入りました。

「執事作品」の増加トレンド

ここでは執事が描かれる作品全体の増加傾向を見ていきます。調査方法は書店取り寄せ

可能な本を検索できる全国書店ネットワーク「e-hon」(<https://www.e-hon.ne.jp/>)を使い、検索キーワード「執事」、検索範囲「広い」を選択し、「執事」「バトラー」「butler」をタイトルに含む作品を抽出しました。

この件数が増えていくことが「執事ブーム」を示すと、ここでは定義します。

漫画はe-honのジャンル「コミック」から、小説は「文庫」「新書・選書」「文芸」「児童」の四つから絞り込みをかけています（コミック文庫は前者に含める）。

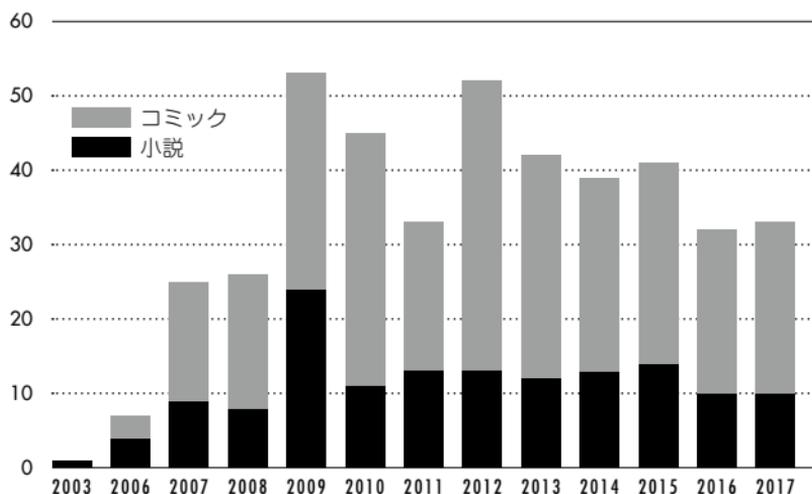
「限定版」など同一作品で巻数が重複するものは、省いています。

検索結果から「執事」作品を見ると、1990年代を含むデータでありながら、「執事」をタイトル文字に含む作品が刊行されたのは2003年でした。2006年の「執事喫茶」をタイトルに増加する傾向が見え、2007年には2006年刊行の7作品の3倍以上となる25作品が刊行され、2009年には52作品にまで増えてピークを迎えました。

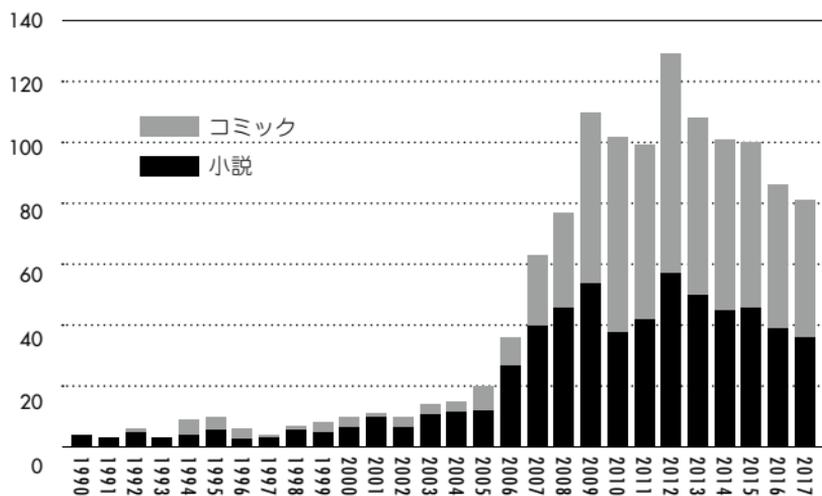
これだけを見ると、「2006年から執事ブームは突然に始まった」と思われるかもしれませんが。しかし、この数字は「執事」タイトルの作品に限定されています。

「タイトルに執事を含まない作品」まで範囲を広げると、執事が主役の作品『戦う！セバスチャン』や『ハヤテのごとく！』などが加わってきます。

† グラフ 0-1 タイトルに「執事」を含む「コミック」と「小説」



† グラフ 0-2 キーワード「執事」で検索して出た「コミック」と「小説」

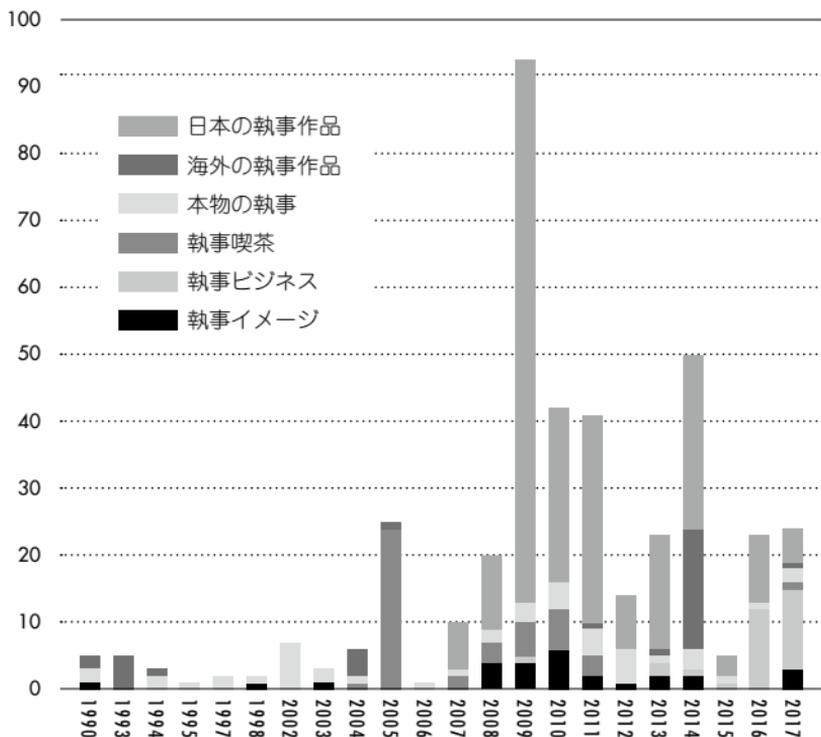


このグラフでは「執事が登場する作品」が増加するトレンドが明確になっていきます。2006年以降に作品数が急増していくのは同様ですが、1990年代後半から安定的に作品は存在、2000年代前半にはブームを作る土壌となる作品数の増加を確認できます。本書ではこの2006年以降の執事ブームに至るまでの期間を「執事トレンド」として、作品数の増加と描写の変化を、「執事イメージを広げるブームの表象」として捉え、第2章から代表作品とあわせて詳細を解説していきます。

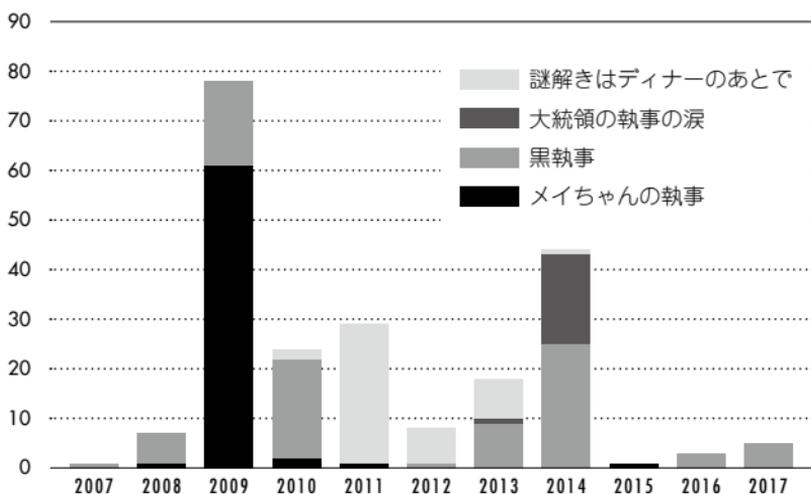
雑誌報道における「執事」

もう一つ「執事ブーム」を示すデータは、「執事」をキーワードに含む雑誌記事から可視化できます。こちらは雑誌データベース「大宅壮一文庫」で「執事」を含む記事を検索しました。雑誌は「本物の執事」から「テレビドラマの執事」までを幅広く扱うため、1990年代から記事があります。「執事ブーム」と呼ぶべき顕著な傾向を示したのは、2006年の「執事喫茶」開始以降の相次ぐ執事喫茶取材記事です。

† グラフ 0-3 キーワード「執事」で検索して出た雑誌記事数(1990-2017年まで)



† グラフ 0-4 キーワード「執事」で検索して出た雑誌記事数(作品数)



キーワード「執事」で検索された雑誌記事 作品別記事本数

そこから増加するのは「執事作品」を伝える記事です。『メイちゃんの執事』、『黒執事』、『謎解きはディナーのあとで』が枢軸を占め、特にテレビドラマ化時は主演タレントが取材を受け、記事が多く書かれました。

コミックや小説の作品数が安定して増加するのと対照的に、雑誌記事の場合はピークを迎えた後、減少します。時事性が高いネタを短期間に多くの媒体で取り上げた後、新奇性は薄れるため、報道価値を失うからです。これは「メイドブーム」でも類似します。

メイド喫茶に比較して執事喫茶は店舗が圧倒的に少ないため記事本数は少ないものですが、メイド喫茶以上に「テレビドラマ化・タレント」との相性が良く、特に2009年『メイちゃんの執事』のテレビドラマ化時は爆発的に記事が増加しました。

本書で「日本の三大執事作品」として『メイちゃんの執事』、『黒執事』、『謎解きはディナーのあとで』を挙げるのは、原作がベストセラーになったことと、ドラマ化・アニメ化などで、「執事」雑誌記事で非常に高い比率を占めるためです。

本書が対象とする「執事」とその領域

本書で解説する執事は、「英国執事（バトラー）」と、その英国執事イメージの延長にある「執事喫茶の執事」、そして「明治以降の近代社会で家のために働いた日本の執事」です。そもそも、「バトラー」の意味を割り当てられた日本語の「執事」は古くから存在し、多くの意味を持ちました。『大辞林』第三版（三省堂、2006年）では、複数の意味が分かりやすく解説されています。

- ① 身分ある人の家にあつて、庶務を執り行う人。
- ② 内豎所・進物所などの庶務職員。
- ③ 院司・親王家・撰閑家・大臣家などの家司の長。
- ④ 鎌倉幕府の職名。
- ⑤ 政所の次官。
- ⑥ 問注所の長官。
- ⑦ 執権の別名。
- ⑧ 室町幕府の職名。
- ⑨ 政所・問注所の長官。
- ⑩ 管領・関東管領の前称。
- ⑪ 江戸幕府の若年寄の別名。
- ⑫ 寺社で、事務に当たる役。
- ⑬ [deacon] キリスト教会の職務の一。聖公会では司祭、ルター派教会では牧師に次ぐ聖職者の職務。長老派・会衆派教会では信徒の職名。聖礼典の補助、会計管理などを行う。正教会では輔祭とい

う。↓助祭。⑨手紙の脇付わきづけの一。貴人への手紙のあて名に添える。

「執事」という言葉には、これだけの意味合いがあります。これらを大きく分類すると、幕府など時の政権における重要役職またはその別名、(2)宗教団体における職務・職名、そして(3)身分ある人の家で事務を行う人に分けられます。これに(4)家事使用人職のバトラーと、(5)執事喫茶や執事ビジネスに従事する人が加わります。

本書は(3)に触れつつ、(4)と(5)を対象とします。江戸時代を含め、それ以前の執事（たとえば室町幕府・足利尊氏の執事、高師直など）は主に扱う「家事使用人」の領域を大きく外れるため、対象外とします。

第1章で、元々の私の専門領域「バトラー」と、それに対応する「明治以降、屋敷で働いた日本の執事」を扱います。

第2章から「執事ブーム」へ至る「執事トレンド」として、「バトラー」が描かれた漫画やアニメと、「日本独自の執事」が登場した広範な作品を扱い、脇役だった執事が低年齢化、主人公化する傾向を描き出します。

第3章では、執事イメージの広がりにより大きな役割を果たした最初の執事喫茶「スワロウテイル」の誕生の経緯と報道と、もう一つの執事喫茶「バトラーズカフェ」を扱います。

第4章では、同じ2006年以降の「執事ブーム」を牽引する『メイちゃんの執事』、『黒執事』に代表される執事作品の増加傾向と、2000年代から2010年代作品を中心に、様々な軸の執事作品を解説します。

第5章は『謎解きはディナーのあとで』の大ヒットとミステリ作品・探偵作品で脇役だった執事が、探偵助手・探偵となっていく変化と、児童向け作品の執事にフォーカスします。第2章で語る対象からミステリ作品は除外し、ここで一気に解説します。

第6章は企業のビジネスで活用されるブランドまで進化した「執事」のイメージと、英国で1980年代から登場する「執事養成学校」とホテルの場での広がりやコンシェルジュとの違い、そして「現代の執事」を考察します。

「日本の執事のイメージ」はどのように変わっていったのか、これから一緒に見ていきましょう。

目次

はじめに 3

私が大好きな「英国執事 (butler)」「(Car) 4

執事イメージが広がる日本 8

「執事作品」の増加トレンド 11

雑誌報道における「執事」 14

本書が対象とする「執事」とその領域 17

Chapter

01 英国執事と日本の執事

37

英国執事の仕事 38

英国執事の資料について 38

執事の責任範囲 39

主人の代理人として屋敷を円滑に運営する仕事 42

もてなす仕事と門番の役割 44

銀器・酒類・灯りの管理 47

英国執事に関連する職種 48

ヴァレット 48

アンダー・バトラー 49

グルームオブザチェインバー 49

フットマン 50

ボーイ 52

英国執事として生きる 52

英国執事になるためのキャリアプラン 52

主人との関係 53

英国執事成立の経緯 59

「執事」を意味する英語 59

英国執事へ至る道筋 60

日本の執事の仕事 62

日本の華族の家を預かった家令 62

華族出身者が語る家政とその規模 66

日本の華族家の「バトラー」考察 68

戦後の「日本の執事」 72

「経営者」に仕える執事 73

宮内庁の「執事」 75

まとめ 77

執事ブーム前の「日本の執事イメージ」 82

バトラーとして描かれる海外の執事 83

「世界名作劇場」シリーズの執事たち 84

『アルプスの少女ハイジ』と「セバスチャン」 85

主人公を支えるヒーロー作品の執事 86

名前のない「執事」 88

日本の執事イメージ 89

華族の執事 90

戦後の上流階級の執事 92

執事と「じいや」 94

執事と「お抱え運転手」 96

執事と秘書 98

ゲームの世界で低年齢化する「執事」たち 101

主人公を支える「日本のヒーロー作品」の執事 102

悪役に忠実に仕える執事 104

メインキャラクター化していく執事 107

物語を動かした「影の主人公」執事 107

生涯のパートナーとなった男性従者 109

主人の別側面を照らし出した「若い執事」 110

レギュラーメンバーとなった英国執事 113

「家事使用人」が主役化する『バジル氏の優雅な生活』 113

青年執事・少年執事の台頭と主役化 115

主役化・パートナー化する「青年執事」 115

「銀食器磨き」をする美形の英国執事と少年公爵 117

元メイドの女主人と青年執事が主役の英国が舞台の作品 119

お嬢様と青年執事・少年執事の恋 120

元祖「S系執事」「丁寧な言葉で相手を責める下克上」 122

「戦う執事」への進化 125

護衛から戦う執事へ 125

執事学校出身の謎めいた青年執事 126

魅力的な老執事 127

日本を代表するベストセラーにいた「戦う執事」 128

「戦う執事」主人公の元祖『戦う！セバスチャン』 131

「少年執事」と「お嬢様の執事」の到達点『ハヤテのごとく！』 132

執事作品のトレンドの俯瞰 134

屋敷の文脈の執事と、「女性執事」 136

少女小説の世界にも登場する青年執事 137

雑誌の「執事特集」から見る執事作品 138

BLと執事 140

世界的執事「ジーヴス」の日本上陸 141

辞書に載るほど有名で有能な「万能執事」 141

礼儀に包まれながら行われる主従逆転 142

2005年から日本で広がっていく「万能執事」 145

「経験不足」を補う学校・ライセンス 146

執事喫茶誕生への機運 154

「メイド喫茶ブーム」から「執事喫茶」待望論へ 154

『腐女子彼女。』が伝える2005年の執事喫茶イメージ 155

最初の執事喫茶「スワロウテイル」誕生へ 158

始まりはブログ「執事カフェ経営戦略部」 158

参加型「執事喫茶起業」企画と、そのイメージ 160

「ケイ・ブックス」による高いサービス志向の徹底 162

英国執事と屋敷コンセプトのユニークさ 165

青年化する執事と、英国化していく執事イメージ 167

メディアが開業の後押し・メディアとの相性の良さ 169

池袋という地域特性と「メイド喫茶ブーム」の反動 171

外国人執事喫茶 BUTLERS CAFE の誕生 173

「プリンセス」を出迎える外国人執事 173

コンセプトは「癒し」 175

テーマパーク的体験型サービスによる差別化 176

雑誌記事報道に見る執事喫茶ブーム 179

「スワロウテイル」中心の報道 179

お嬢様気分を味わえる価値 183

ホストクラブとの比較 183

BL的消費の側面 187

女性向け「イケメンカフェ」の台頭 188

執事喫茶ビジネスの難しさ 190

英国執事化と執事資料刊行史 191

04 執事ブーム 1

2006年からの執事作品増加とその広がり

「執事」が主役の作品の増加 198

『メイちゃんの執事』 199

「お嬢様と青年執事」が主人公の作品 199

お嬢様のために戦う執事 200

ランク制度と執事養成学校の発展 201

宮城氏が語る執事イメージ 203

「イケメンドラマ」と拔群の相性のドラマ化 204

雑誌での『メイちゃんの執事』年別記事数 204

『黒執事』 206

「英国執事」と「戦う執事」の正統後継者 206

主従逆転と主人への毒舌 208

執事作品の系譜としての『黒執事』 209

メディアミックス展開 210

『黒執事』を含む記事を掲載した雑誌とその発行年 211

世界への影響 214

『執事様のお気に入り』 214

上流階級の子息が「執事」修業する時代へ 214

「学園生活と執事修業」の両立 216

お嬢様と「下僕」の恋愛『蝶よ花よ』 216

2006年からの「執事」作品 218

主役化する執事を示す「執事アンソロジー」 218

2007～2008年の執事作品 219

少女小説・ライトノベルでの執事作品の台頭 220

パートナーとしての執事の確立 222

1. 最初から執事がいる境遇の主人公 222

2. 突然、執事がいる境遇になる主人公 225

3. 伝統的執事 226

4. 男性向け作品の執事設定 228

5. 主従逆転 230

執事のなり手の多様性 231

1. 未経験からの執事の増加 231

2. 女性が執事になる構図 232

3. 経験者の執事が女装する作品 234

執事作品をリードするBL作品の隆盛 235

2006年刊行の執事アンソロジーとDS執事への道 235

メディアミックスする執事作品 236

『このBLがやばい！』シリーズで俯瞰する執事 237

「執事」の描き方の進化 238

執事不在からメインキャラクター化への変化 239

舞台となる「執事養成学校」 239

戦う執事の発展 241

ファンタジー作品に派生する「戦う執事」 242

アンドロイド・ロボットの執事 244

「執事ブーム」を経たヒーロー作品の執事 245

「執事ブーム」時の特撮作品 247

ゲームの執事 248

女性向け恋愛ゲームの執事 250

変身少女作品と執事 253

執事喫茶作品の誕生 255

「執事喫茶作品」の誕生と「ドラマ」との相性の良さ 255

舞台化とゲーム化のメディアミックス 256

「スワロウテイル」が全面協力したドラマ 259

執事喫茶の漫画・小説作品 259

執事のコスプレ化 261

「執事」のいるホテル 262

「理想の王子」としての役割 263

メイドがいる作品に登場する「執事」 264

メイドがいる作品の途中から、執事が登場 264

「執事」と「執事喫茶」の共存 265

メイドの職場にいる「英国執事」 266

現代に働くメイドと同僚の執事 268

海外での執事情報の増加 269

2010年からの家事使用人資料 271

まとめ 272

Chapter

05 執事ブーム 2 ミステリと児童作品の執事 275

大ヒット作品『謎解きはディナーのあとで』登場 276

「お嬢様」に仕える「毒舌執事」の確立 276

- 出版史上に残る大ベストセラーが広げた間口 278
- 女性から見た「執事の魅力」 282
- ドラマ化とメディアミックス 283
- 『謎解きはディナーのあとで』の余波とトレンドの象徴 285
- ミステリにおける執事イメージ 288
- 英国の古典ミステリ作品と執事の親和性 288
- 日本の探偵小説と執事 290
- 1990年代の執事のメインキャラクター化の萌芽 294
- 1990年代の「新本格」ブーム 295
- 海外作品の執事と、「探偵と従者」の構図 297
- 「探偵助手」から「探偵」への道筋 300
- 英国化の進展 302
- 英国執事の徹底的再現と、日本の執事の融合 303
- テレビドラマで身近な「執事」 306
- 児童作品と執事 探偵小説から一般作まで 308

探偵小説と執事の相性 308

「子供探偵」と「怪盗」と「執事」 312

児童作品全般での執事の自由化 314

まとめ 316

Chapter

06 現代の執事イメージ

319

企業による執事イメージの活用 320

CMでの執事起用 320

執事作品とのコラボ 322

日本を代表する企業による執事サービス 324

「コンシェルジュ」と「ホテルバトラー」 325

ホテルの「外」へ広がる「コンシェルジュ」 326

日本における「コンシエルジュ」の広がり 328

コンシエルジュとホテルバトラーの違い 330

現代の英国執事事情 332

英国王室の「執事」 333

「執事養成学校」の誕生と発展 335

ホテルバトラービジネスの成長 338

世界中での執事需要の増大 342

大使館・大統領の執事 345

執事イメージの活用と広がり 349

執事喫茶スワロウテイルの多面的展開 350

地域経済活性化を掲げる「執事の館」 351

「執事」イメージの商品 353

「執事眼鏡 eyemirror」 354

紅茶教室と執事 355

「お嬢様になる」ガイドとしての執事 356

「日本の執事イメージ」を提供するサービス 359

まとめ 360

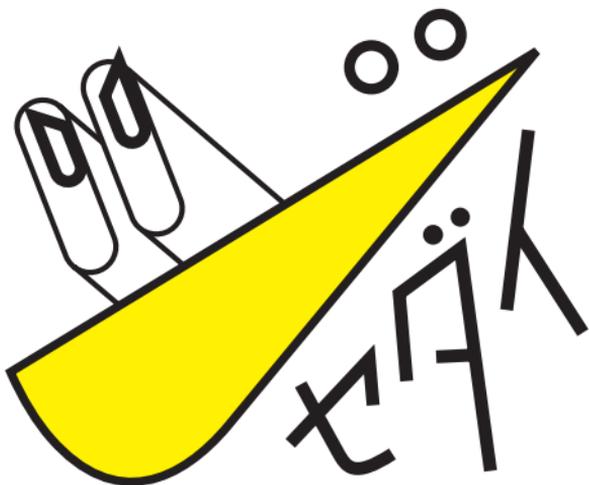
エピソード 364

あとがき 377

図版の出典 380

主要参考文献 382

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!